



ピーター・ウイスベルウェイ (2018.1.10) © 大窪道治

パトリツィア・コパチンスカヤ(ヴァイオリン)
&**カメラータ・ベルン**

ジョヴァンニ・アントニーニ(指揮)
&**イル・ジャルディーノ・アルモニコ**

世界最先端がTOKYOで交錯する、幸福なニアミス 伊東信宏

郷古 廉(ヴァイオリン)&**ホセ・ガヤルド**(ピアノ)
ストイックな音楽家、困難事に挑む 船木篤也

トッパンホール ニューイヤーコンサート 2025

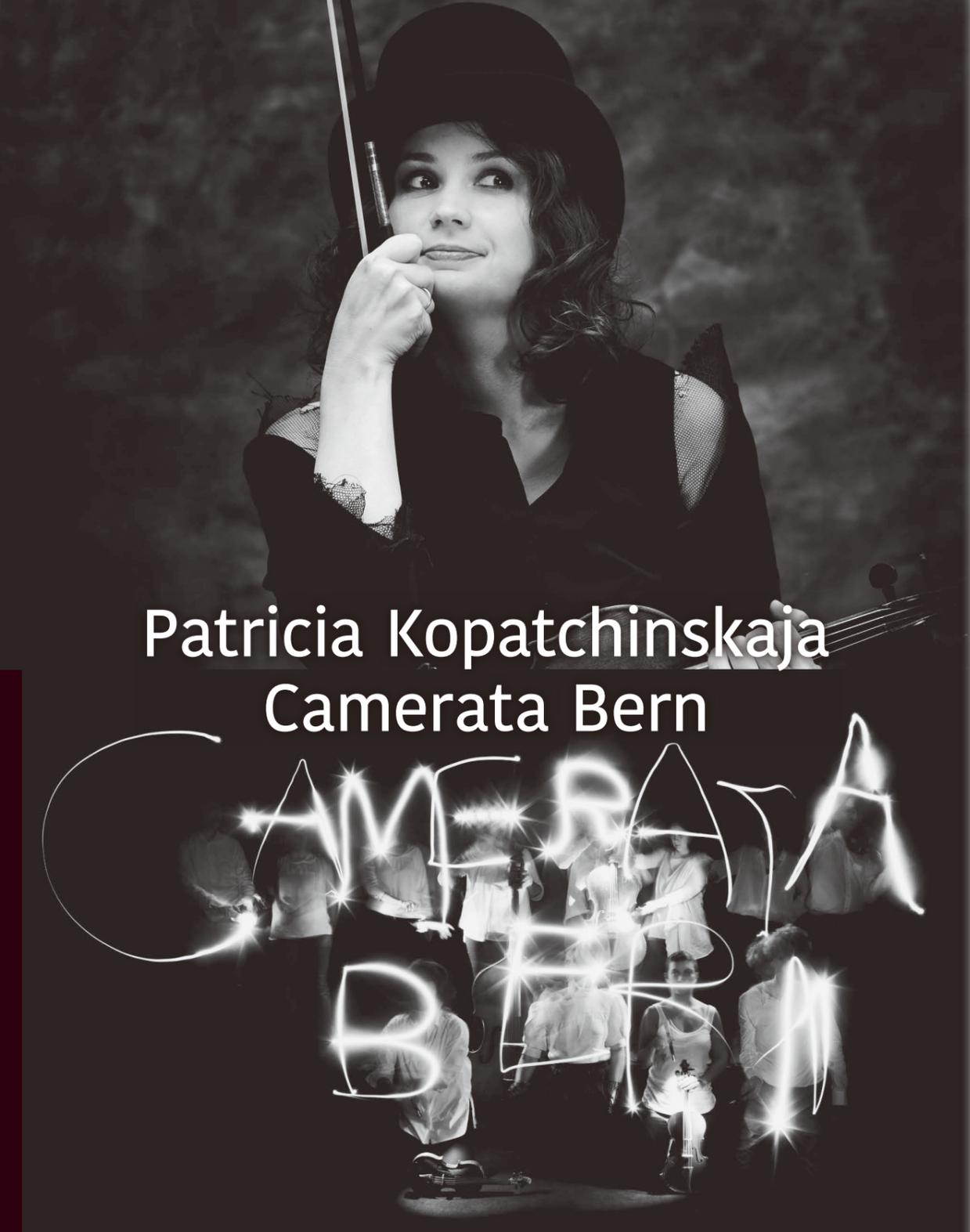
ピーター・ウイスベルウェイ(チェロ)
山根一仁、毛利文香(ヴァイオリン)／湯本亜美(ヴィオラ)／北村朋幹(ピアノ)
唯一無二の室内楽に出会える、特別な体験 柴田克彦

[Schedule 2024.11～2025.4]

[Information]

2024/2025シーズン主催公演[後期]ラインナップ最新一覧

ランチタイムコンサート Vol.131 特別企画 湯本亜美(ヴァイオリン)／アントニオ・メネセスを偲んで



Patricia Kopatchinskaja Camerata Bern

この冬必聴の二大アンサンブル登場



Giovanni Antonini Il Giardino Armonico



世界最先端がTOKYOで交錯する、幸福なニアミス

伊東信宏

パトリツィア・コパチンスカヤがカメラータ・ベルンと一緒に演奏した(12/7、12/9)数日後に、ジョヴァンニ・アントニーニがイル・ジャルディーノ・アルモニコを振る(12/13)。これは世界的にみても注目に値するホットな状況で、この冬トッパンホールで実現する。コパチンスカヤとアントニーニという二人の音楽家、および彼女と彼が率いるふたつの楽団は、現代の演奏界の最前衛、震源地である。二人はかなり異なる方角からやってきて、それぞれの領域を突き抜け、はみ出し続けながらいま我々の目の前で交錯している。

* * *

コパチンスカヤは、豊穣な民俗音楽の世界をバックグラウンドとしながら、古典はもちろん20世紀以降の音楽の領域で目覚ましい成果をあげている音楽家である。もともとはヴァイオリニストで(いまもちろん世界で最も刺激的なヴァイオリニストであることは確かだが)、後述のとおり声の領域でも他の追従を許さない表現者である。

父親ヴィクトール・コパチンスキ氏は、旧ソ連時代の著名なツィムパロン奏者であり、母親はその楽団のヴァイオリン奏者だった。ルーマニアとウクライナに位置するモルドヴァの頑健な農夫の血を受け継ぐコパチンスキ氏は、トウモロコシしかない故郷を飛び出して、才気と猛練習とで成功を収めた。その鬼気迫る名人芸は、いまもYouTubeで聴くことができる。そのひとつに、ジブシー・バンドの定番曲《ひばり》を演奏している白黒映像があるが、ちょうどこれを録画した晩にパトリツィアが生まれたという。パトリツィアは小さい頃、このような両親の音楽を浴びるように聴いて育った。

その後冷戦末期、一家は西側に亡命し、ウィーンに住むようになる。パトリツィアはウィーンから、やがてベルンの音楽院で学んだ。近年までパトリツィアはベルンを拠点としていたので、今回のカメラータ・ベルンとの縁もそんな中から自然と深まってきた(現在は同楽団のアーティストック・パートナーである)。彼女は「野生児」というような捉え方をされることが多いが、実際には非常に真摯で、知的な音楽家である。パッサを弾く時には自筆稿を使う

し、古典派の音楽を弾く時には古楽的奏法を取り入れることも辞さない。常に止まることがない。一時、手の故障の故にヴァイオリン演奏をセーブしなければならなくなったが、その間にシェーンベルクの《月に憑かれたピエロ》の歌唱(ご存知のようにシュプレヒシュティンメ)を本格的に学び、その成果は画期的な録音として話題をさらった(2019年の終わり、コロナ禍直前の録音)。その延長で昨年、東京で、身体中に古新聞やポロ切れを貼り付けた格好でリゲティの《マカプルの秘密》を歌い、叫び、呻いた姿をご記憶の方も多いのではないだろうか。

今回の演奏会のひとつ《死と乙女》は、シューベルトの弦楽四重奏曲の彼女自身の編曲による弦楽合奏版を主体として、そこに凝りに凝った選曲の「死」にまつわる作品を挟み込んでゆく、というもの。オンラインで目撃した《死と乙女》の演奏では、彼女は死神であると同時に少女でもある扮装(!)で、この曲を縦横無尽に弾いていた。

* * *

ジョヴァンニ・アントニーニとイル・ジャルディーノ・アルモニコ(以下IGA)は、ピリオド楽器によるいわゆる「歴史的考証を踏まえた演奏(ヒストリカー・インフォームド・パフォーマンス)」を代表する団体のひとつである。いわゆる「古楽」には、オランダやスイスなどいくつかの中心があったが、イタリアがその一角を占めるようになったのは、彼らゆえだった、とすら言える。アントニーニ自身は、冴え渡ったリコーダー、フラウト・トラヴェルソの演奏家だが、1985年にスイスのリュート奏者、ルカ・ピアンカと共にミラノでIGAを設立し、以来この楽団を率いて、もう40年近くになる。

驚くべきなのは、このキャリアの長さからは想像できないほど、彼らの演奏が若々しいことだ。ジョヴァンニ・アントニーニの指揮は、いわゆる巨匠的な指揮ぶりとは対極にあり、常に演奏家を駆り立て、演奏家たちもこれに敏感に反応して、果敢にリスクに挑む。バロック音楽に安定や構築性のようなものを求める聴き手がいるとしたら、彼らは何があってもそういう期待には応えまい、と決心しているように見える。

彼らが今挑んでいる大きな企画に《Haydn 2032》というプロジェクトがある。これはハイドン生誕300年の2032年までに交響曲全曲録音を完成させる、というCD、映像記録、および演奏会などを組み合わせたプロジェクトである。指揮はアントニーニで、演奏はIGAとバーゼル室内管弦楽団が交代で担当している。交響曲全集といっても、順番に演奏していくわけではなく、はっきりしたコンセプトを掲げて幾つかを選び、さらにハイドン以外の作曲家による関連する作品を含むというやり方で進んでおり、2014年に始まったプロジェクトは、現在半ばあたりまで進行している。

アントニーニが、ハイドンに取り組む理由は上に述べたような彼の指向からすれば明らかだろう。彼が音楽に求める敏捷性、躍動、驚きといった要素は、まさしくハイドンのものだからだ。というよりも、正直に言えば筆者はアントニーニがハイドンを指揮しているのを見て聴いて、ようやく彼の真価が理解できた(と同時に、ハイドンの音楽の本質についても認識を新たにした)。今回のトッパンホールでの演奏会でも、この《Haydn 2032》の最新の成果のひとつである交響曲第44番《悲しみ》を中心に据えたプログラムが聴ける。短調が軸となったプログラムで、バロックからの地続きだったハイドン中期の音楽で短調が(モーツァルトやベートーヴェンの短調とは違う)どんな意味を持っていたのか、新しい発見があるに違いない。

* * *

これまでにコパチンスカヤとアントニーニ+IGAは競演もしている。その強烈な成果が「ヴィヴァルディ、その先に」と題されたCDである(そのメインとなったヴィヴァルディの協奏曲《海の嵐》の演奏ぶりもYouTubeで確認できる)。民俗音楽と現代音楽の旗手が、古楽の最先端と丁々発止のやりとりを繰り広げるさまは息もつかせぬものだった。今回のトッパンホールでのニアミスは、(共演ではないが)二人のリーダーとふたつの小アンサンブルが見せる、もうひとつのつばぜり合いだ。演奏の世界の最先端を見届けるには絶好の機会だと思う。

(いとう・のぶひろ/阪大中之島芸術センター)

Antonini Armonico



Sunao Goko & José Gallardo

スティックな音楽家、困難事に挑む

船木篤也

郷古廉のヴァイオリンは、一言でいうと、非の打ちどころがない。テクニックはまったく危なげがないし、その音は痩せることがなく、かつ肥大せず、これしかないという張りを湛えている。またその音楽は、決して人に媚びることがなく、かつ人を峻拒しない。古楽ふうを気取ることもしなければ、これみよがしなモダン臭もない。ならば優等生かといえば、そんな退屈なものではない。ある種の凄味があって、2020年の暮りにトッパンホールで聴いた無伴奏リサイタルでは、筆者はそれにすっかり打ちのめされた。ピーパーからバルトークまで、ただ作品だけが、くっきりとした輪郭をもってそこに屹立していたのである。

「Aではなく、Bでもない」と否定癖ばかりを重ねたが、ここで誤解を恐れずに要約めいたことを言えば、郷古廉は最も通俗的な意味での「ソリスト」ではない。受けをねらうソリストであれば、AかBのどちらかに、多少なりとも振れてみせるであろう。彼はその後、NHK交響楽団のゲスト・コンサートマスターという新しい道を進んだが、なるほどあのような音楽性はオーケストラに有効だろうと合点がいったものである。

その音楽性はしかし、同時に大きな困難を背負うことになるかもしれない。というのも、聴き手とは、ときに怠惰な存在だからだ。

聴き手にはどこか、自分で感じ取り、考える前に、奏者の側でやってほしいと願っているようなところがある。少なくとも筆者は、そんな願いがゼロではないと感じている。郷古は先の無伴奏の夕べから2年後に、かねてから共演者に指名していたピアニスト、ホセ・ギャルドとのデュオを同じトッパンホールで実現したが、正直に言えば、筆者はわずかに物足りなさを感じたのだ。プーランクのソナタもベートーヴェンの《クロイツェル》も、同じように非の打ちどころがない。だがまさにそれゆえに、二人の違いをもっと、彼ら固有のくさみをもっと——とそう思ったのである。この種の要求に対し、郷古はどう応えるだろうか。

彼はこの間、N響ではより責任の重い第1コンサートマスターに就き、室内楽の経験も、格段に多く積んできた。なにがしろ変化を遂げているはずだが、スト

ックな彼のこと、困難な道からそれて卑俗なほうを向くことはないだろう。彼の道から発する音楽の、その精度というおろか、ニュアンスの襲いおろか、そうしたものをより濃やかなものにしてに違いない。

今回の演目をみると、それこそ困難事に挑んでいるようにみえる。同じ《幻想曲》とはいっても、シェーンベルクの十二音音楽にシューベルトのハ長調をいったいどう続けるのか。どちらも、それだけでもう大変に困難な曲であるというのに。そして次に、短いながら極度の緊張を強いるウェーベルンの小品を置き、プゾーニ自身が「実質上の作品1」と呼んだ、長大かつロマンティックな第2ソナタを弾く。演奏効果という点からすれば、俗なソリストなら最終演目には置かないだろう音楽である。

ピアノを弾くのは、今回もホセ・ギャルドである。筆者は最近、間近で接する機会もあったが、彼はとてもクレバーな人だ。自己流を押し通すのではなく、共演相手の音楽性をたちどころにつかみ、それと共働して創意を凝らす。アルゼンチン出身だが、ドイツ語を流暢に話し、シューマン作品に関するどんな質問にも、豊かな知見を披瀝してくれた。なるほど、郷古が共演相手に強く欲するわけだ。独逸系作品がならぶ今回の公演にも、もってこいの人だろう。

(ふなき・あつや／音楽評論家)

郷古 廉(ヴァイオリン)&ホセ・ギャルド(ピアノ)

2024年11月20日(水) 19:00

R.シュトラウス:ダフネ練習曲
シェーンベルク:幻想曲 Op.47
シューベルト:幻想曲 ハ長調 D934
ウェーベルン:4つの小品 Op.7
プゾーニ:ヴァイオリン・ソナタ第2番 ホ短調 Op.36a

6,000円/U-25 3,000円 全席指定
特別協賛:株式会社きんでん

TOPPAN HALL New Year Concert 2025



パトリツィア・コパチンスカヤ(ヴァイオリン)& カメラータ・ベルン 完売

I《死と乙女》

2024年12月7日(土) 17:00

ネルミガー(ヴィアンチコ編):死の舞踏
作曲者不詳(コパチンスカヤ編):ビザンティン聖歌 詩篇140篇
シューベルト:弦楽四重奏曲第14番
二短調 D810《死と乙女》第1楽章*
シューベルト(ヴィアンチコ編):死と乙女 D531
シューベルト:弦楽四重奏曲第14番
二短調 D810《死と乙女》第2楽章*
ジェズアルド:《マドリガーレ集第6巻》より
《わたしは死ぬ、わたしの悲運ゆえに》
シューベルト:弦楽四重奏曲第14番
二短調 D810《死と乙女》第3楽章*
クルターク:リガトゥーラーフランセス=マリーへのメッセージ
(答えない問いかけへの答え) Op.31b
クルターク:《カフカ断章》Op.24より(休みなく)
シューベルト:弦楽四重奏曲第14番
二短調 D810《死と乙女》第4楽章*

ヴァイオリン独奏と弦楽オケのために、コパチンスカヤ自らが編曲した《死と乙女》*に、16世紀から現代にわたる様々な作品を各楽章間に挿入してのライヴ・パフォーマンス

II《ベルンより愛をこめて》

2024年12月9日(月) 19:00

コダーイ(ヴェレシュ編):マロシュセーク舞曲
ガブリエル・ブルナー:
弦楽アンサンブルのための情景II
(2022年カメラータ・ベルン委嘱作品/日本初演)
メンデルスゾーン:ヴァイオリン協奏曲 二短調
ヴェレシュ:ムジカ・コンチェルタンテ
バルトーク:ルーマニア民俗舞曲 Sz68

特別協賛:鹿島建設株式会社

協賛:タマゴリ株式会社/株式会社トータルメディア開発研究所/株式会社トッパン・コスモ/凸版物流株式会社/株式会社BookLive/株式会社フレール館

ジョヴァンニ・アントニーニ指揮 イル・ジャルディーノ・アルモニコ

2024年12月13日(金) 19:00

モーツァルト:ディヴェルティメント 二長調 K136 (125a)
ハイドン:交響曲第52番 八短調 Hob.I-52
A.ベルト:主よ、平和を与えたまえ
シャイト:《音楽の戯れ》より
第4曲(4声の悲しみのパヴァーヌ)イ短調
ハイドン:交響曲第44番 ホ短調 Hob.I-44《悲しみ》
10,000円/U-25 5,000円 全席指定
特別協賛:株式会社 安藤・間

唯一無二の室内楽に出会える、特別な体験 柴田克彦

トッパンホールのニューイヤーコンサートは、通常と違ったシリアスな本格作中心の重量級公演であるのが常。出演者は、①ホールが信頼を寄せる海外の実力派アーティスト、②ホールにゆかりの深い日本人アーティスト、③未来へ向けてホールが成長の後押しを図る若手アーティストが主軸となる。すなわちホールのこだわりが強く押し出され、独自の祝祭感を醸成する。そうした「ここでしか体験できない」コンサートが、トッパンのニューイヤーだ。

2025年は前記3点を併せ持つ「いかにもトッパンらしい」陣容といえるだろう。柱は①のピーター・ウィスベルウェイ。世界のトップ・チェリストの一人である彼は、変幻自在の音でしなやかに歌いながら作品の本質を浮き彫りにする。当ホールには08年以来たびたび出演。多様な形態で魅了し、18年には当ホールのニューイヤー史上最もディープな公演と称される無伴奏のコンサートも行った。だが最後の出演は19年のサントリー音楽賞受賞記念演奏会。6年ぶりの今回は本公演のためだけに来日するので、当然見逃せない。

さらには②の3人が加わる。ヴァイオリンの山根一仁と毛利文香、ピアノの北村朋幹だ。12年以来多数の公演に出演を重ねる山根は、当ホールの後押しで成長してきたアーティストの代表格。ドイツ留学を糧にした最近では、持ち前の強靱な表現に人間の妙や軽みを加えているので楽しみだし、19年にウィスベルウェイと迫真的な共演(*)を果たしている点も心強い。元々知的で密度の濃い音楽を奏で、ヨーロッパ留学から帰国して意気新たにしている毛利と、07年以來長く出演を続け、シャープでハイセンスな表現に磨きをかけている北村も、当ホールには欠かせない存在。なお、山根と北村の共演も19年のトリオ公演(*)以来6年ぶりとなる。

一方で③の俊才に注目が集まる。本公演ではヴィオラを弾くヴァイオリンの湯本亜美だ。東京芸大を経てドイツで学んだ彼女は、現在名門シュターツカペレ・ドレスデンで第2コンサートマスターを務める実力者。公演2日後には(ランチタイムコンサート)に出演するので期待値が高い。

プログラム前半はウィスベルウェイの無伴奏。しかもバッハの無伴奏組曲全6曲のなかでも内面的・瞑想的な第2番と、バッハに根ざしながら多彩を極めるブリテンの無伴奏組曲第1番と難曲が並ぶ。共にウィスベルウェイが再三取り組ん

できた最重要作品。なかでもブリテンは11年に無伴奏組曲3曲全曲演奏会の表情豊かな快演で驚嘆させた実績がある。今の彼がこれら自家菜籠中の楽曲をどう聴かせるか? 熱視線が注がれる。

後半はメンバー全員によるショスタコーヴィチのピアノ五重奏曲。社会主義リアリズム路線の明快さと、シリアスな厚重さや抒情性、シニカルなテイストなどが絶妙なバランスで並立した、20世紀屈指の名曲が、作曲家没後50年記念イヤーの冒頭を飾る。この濃密な傑作における名手たちのコラボは、まさに本公演でしか味わえない特別な体験となる。

なお、ショスタコーヴィチはバッハに生涯尊敬の念を抱き続け、同時代のブリテンとは深い友情で結ばれていた。またブリテンとショスタコーヴィチには、偉大なチェリスト、ロストロポーヴィチに啓蒙された共通点もある。そして、旧ソ連の恐怖政治のなかで苦闘を続けたショスタコーヴィチの作品が今の世に相応しいのは言うまでもない。

トッパンのニューイヤーは、やはりあらゆる点で意味深い、唯一無二のコンサートなのだ。

(しばた・かつひこ／音楽評論家)

*1: 第47回サントリー音楽賞受賞記念コンサート(2019年4月)
*2: チェロの上野通明と、ベートーヴェン、ラヴェル、シューマンのピアノ・トリオを演奏(2019年7月)

トッパンホール ニューイヤーコンサート 2025

2025年1月20日(月) 19:00

ピーター・ウィスベルウェイ(チェロ)
山根一仁、毛利文香(ヴァイオリン)/湯本亜美(ヴィオラ)/北村朋幹(ピアノ)
J.S.バッハ:無伴奏チェロ組曲第2番 二短調 BWV1008
ブリテン:無伴奏チェロ組曲第1番 Op.72
ショスタコーヴィチ:ピアノ五重奏曲 二短調 Op.57
6,500円/U-25 3,000円 全席指定
特別協賛:鹿島建設株式会社

Table with columns: 日時, 公演. Includes dates like 11/11, 11/20, 12/7, 12/9, 1/20, 3/10, 3/26, 3/27.

Table with columns: 日時, 公演. Includes dates like 3/28, 4/3, 4/5, 11/22, 1/22, 2月.

※開場は開演の30分前となります。 ※未就学児のご入場はご遠慮ください。...

2024年10月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

INFORMATION

2024/2025 シーズン主催公演 [後期] ラインナップ 最新一覧

Table with columns: 2025年, 日時, 公演, 発売日. Lists performances from 4/3 to 8/5.

※発売日は変更になる可能性があります。記載の発売日は一般発売日です。...



ドイツの風薫る、豊かなるひととき



若き逸材の渾身のステージをお届けしている「ランチタイムコンサート」...

「ランチタイムコンサート Vol.131」特別企画 湯本亜美 (ヴァイオリン)

Frei Aber Einsam—ブラームスという人 2025年1月22日(水) 12:15 兼重稔宏 (ピアノ)...

アントニオ・メネセスを偲んで —素晴らしい音楽家であり、かけがえのない友人に捧ぐ



2023年11月15日、世界的チェリストのアントニオ・メネセスが、J.S.バッハの無伴奏チェロ組曲...

ルがまだ記憶に新しい、ここトッパンホールで開催されます。ソリストとして活躍する一方で、伝説的なボザール・トリオ...

2024年11月12日(火) 18:00 堀米ゆず子 (ヴァイオリン) / 今井信子 (ヴィオラ)...

チケットのお申し込み: トッパンホールチケットセンター

表紙: ピーター・ウィスベルウエイ

「弦のトッパン」の名を広めた初期プロジェクトのひとつ、シリーズ「チェロ最前線」で2008年に初登場...

編集後記

ついに開幕した2024/2025 シーズン! オープニングは「ベートーヴェン—その多様さを聴く」と題し...

今号の特集でpickupした、パトリツィア・コパチンスカヤ&カメラータ・ベルン...